
嘘つきは誰だ

七緒 湖李

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

嘘つきは誰だ

【Nコード】

N9030Y

【作者名】

七緒 湖李

【あらすじ】

ひよんなことから学校で大人気の女の子に告白することになった男子高校生の話。

ムーンで掲載中の連載小説が書けない状態なので、なんとなく浮んだこの話を書くことにしました。

「安在さん。突然で驚くと思うけど好きです。俺とつきあってください」

高3の初夏。

受験生の俺がなぜ学年一美人と名高い彼女に告白しているのかという――。

「航平^{こうへい}、仇^うとつて仇^う！」

幼馴染みの泰治^{やすはる}に泣きつかれたのは今日の昼休みのことだ。

泰治とは幼稚園から一緒に小学生の頃まで毎日のようにつるんでいたが、中学からは疎遠になり同じ高校に進学したはずが、その頃には話をすることもなくなっていた。

高3で数年ぶりに同じクラスになって、また話をするようになった泰治が、ずっと密かに片想いを続けていたらしいと知って俺は単純に驚いた。

女の子に興味があつたのかと。

いや別に変な意味じゃない。

昔は女の子より仲間と遊ぶ方が好きだったという意味だ。

泰治が片想いしていたのは隣のクラスの安在雛姫^{ひなめ}。

俺も彼女は知っている。

茶色のふわふわの髪や肌の白さは異国の血を引いているせいだとか、そのせいかスタイルがよく特に胸がでかいだとか、これからの体育

の授業が水泳に変わるのが楽しみでならないだとか。

ともかく男の邪心……ではなく憧れの彼女の彼女は文句なくきれいだ。しかも彼氏がいない。

とくれば男が放っておくはずもなく彼女はすこぶるモテていた。

泰治もその一人だったようだ。

またすごいところに手を出したなと思いつつも俺は尋ね返す。

「仇？」

「見下すような顔されて無理って——ひどくね？あんな子だと思わなかった。男の純情踏みにじりやがって」

屋上で食後の苺ミルクを飲んでいた俺は、隣にいた巽と顔を見合わせる。^{たつみ}

「泰治、安在が告ってくる男を振るのはいつものことだ」

俺がズズッと紙パックの中身を飲み干し言つと巽も頷く。

「それはもはやこの学校の七不思議のひとつ——」

「にはなつてねえから！」

俺が素早く突っ込みを入れると巽は、済ました顔で読みかけていた少年漫画に視線を落とした。

泰治と疎遠になったかわりに中学から仲良くなった巽は、ちょっと変わり者だが俺の親友だ。

面倒臭がりで何を考えているかわからないところもあるのに、なぜかこいつという時が一番楽だった。

巽と同じクラスで俺は休み時間こいつの他、数人の友達と過ごす。泰治とはこれまでの空白の数年のせいかな、つるむことはなくなってしまう。

が、こんなふうになるときおり話しかけてきたときのなつっこさは昔の彼を思い出す。

「で、木戸君。航平に仇とってどういふことですか？」

漫画から顔もあげずに巽が促すと泰治は一瞬ムツとしたような顔を

した。

（巽、人と話すときはせめて顔あげる）

しかも敬語を使ったことで、どうやら泰治には馬鹿にされたように聞こえたらしい。

巽を無視して俺に懇願するよう言った。

「航平っ。安在をおまえに惚れさせてそのあとこっぴどく振ってくれ」

「はあ!？」

「俺が味わった屈辱を彼女にも味わわせてやるんだ。大丈夫、おまえ面はいいから女が好きそうな甘い言葉吐いて誑かせば絶対落ちるって!」

「や、俺、無理だつて。ていうかおまえ、仮にも好きだった子に対して——」

これって世間的にはこう言うんじゃないか？

「最低だね、木戸君。そういうの逆恨みって言っんですよ」

そう、それだ。

逆恨み。

巽が棒読みで言うつとピクと泰治は眉を釣り上げた。

「成山、さつきからおまえうるせえよ。俺と航平の話に口挟んでくんな。この漫画オタクが」

そして俺に向かって猫なで声を出してくる。

「頼むよ、航平。俺とおまえの仲じゃん」

「いやだ」

「冷たい」

「この件に関しては冷血漢でいい」

「ふーん、そんなこと言っているの？おまえの過去学校でバラすぞ？」

泰治の言葉に俺はギクと顔を強張らせてしまった。

逆に泰治はニヤリと俺に向かって笑う。

ちくしょう、こいつはアレを知ってるんだった。

「……わかった。とりあえず放課後、安在に告る」

「え？おまえに惚れさせてからじゃねえとさあ」

「心配しなくても俺と彼女は既に顔見知りだ」

隣のクラスだから彼女も俺の顔ぐらいは知ってるはずだろう。

そういう意味での顔見知りだが真実は黙っておく。

「ふうん。やっぱおまえってそういう奴だよな」

「そっいう？」

「顔が広いつつてんだよ。昔っからそうじゃん？んじゃ頼りにしてるぜー、西嶋航平君」

にこやかに泰治が屋上からいなくなったところで、巽がパタンと漫画を閉じて俺に目を向けた。

じいっと見つめてくる目に責められているようだ。

「航平、木戸にどんな弱み握られてんの？」

「え？」

逆恨みした男の復讐を手伝うなんて、てっきり軽蔑されたかと思っていた。

「俺、航平と友達になったの中学からだからそれ以前のことだよね？小学校の頃の話？」

「言いたくない」

「実は小学校の影の支配者だったとか？」

「言わないって言ってんだろ」

「そこまで言いたくないの？じゃ聞かない。そろそろ昼休み終わるし教室戻る？」

漫画片手に立ち上がる巽を追って横に並びながら俺はつい尋ねてしまった。

「とめないのか？」

「うん。だって俺、木戸って嫌いだし関わりたくない。自分でなんとかしてね」

「嫌いって……はつきり言うなあ」

「航平の友達みたいだから黙ってたけどちょっと限界。さっきのあれ、全世界の漫画好き敵にまわしたよね、彼」

「もしかして漫画オタク発言にキレた？普通、逆恨みの方を気にしないか？」

「そこはもう男としてどうかいうレベルでなく人間として終わってるよね」

階段を降りつつ巽が抑揚のない声で言う。

こいつは普段から淡々とした口調で話すからいまいち感情が読みにくい。

けど人として終わってる発言はかなり辛辣だから、相当泰治のことが嫌いなのだろう。

実際俺もあいつのやろうとしていることは理解できない。

「昔はあんなじゃなかったんだけどなあ」

「時間の流れってときに無情だよ」

トンと廊下に降り立った巽は俺を振り返った。

「航平が本気で困ったら言うてね」

「心配してくれんの？」

「うん、ちよつと——」

「ちよつとかよ」

脱力した俺が教室に向かって歩き出すとちょうどチャイムが鳴り始めた。

「嫌な感じだったから」

「ん？なんだって？」

チャイムのせいで巽の言葉が聞こえなくて尋ね返したが返事はなか

った。

* * *

そして放課後、俺は隣のクラスの安在雛姫を第2校舎裏に呼び出した。

昇降口にある下駄箱にメモを入れて呼び出す古臭い手だがうまくいったようだ。

泰治は物陰に隠れて俺たちの様子を見ているはず。

俺は安在に告白してすっぱり振られるつもりでいた。

そもそも今日まで話をしたこともない彼女に告ったところでうまくいくはずがないし、ここで俺が泰治と同じ目に合えばあいつも同類ができて逆恨みなんてやめるだろう。

熱気を孕んだ風はこれからくる夏を思い起こさせる。

大音量の蝉の鳴き声、うだるような暑さ。

考えるだけでうんざりしたくなるが、この風に揺れる彼女の髪は軽やかでどこか涼しげに見えるから不思議だ。

柔らかそうな髪だなあと思いつつ俺は安在の顔を見て正直引いた。
なんか俺、すんげえ睨まれてるよな。

これが泰治の言ってた見下しってやつか。

じゃあこのあと俺は「無理」って振られるわけだ。
よし、こいつ。

「あの、西嶋君？」

突然呼びかけられた俺は彼女が近づいてきたためどきまぎした。

「本当に？」

俺を見上げてくる目が……さっきより怖いのはなんだ。

目を細めて睨まれると美人なだけに迫力がある。

「本当につて、えーつと確かに俺らあんまり話したこともないけど

――」

というより話をしたのは今日がはじめてだけだな。

そんな俺から「好きです」つて言われても信じられないのは当たり前だろう。

「3年2組西嶋航平君」

クラスとフルネームを言われて俺は「はい」と思わず返事をしていた。

瞬間、彼女は飛びのくように後ろに後退る。

近づいたり離れたりつてなんだ、このおかしい行動は。

しかもなんかぶつぶつ言ってる。

もしかして行動が挙動不審な上、電波と交信でもするイタイ人だったかと俺は身構えた。

だがよくよく聞けば「どうしよう」とか「やっぱり無理かも」と言っている。

無理でいいんだ。

ここは素早く瞬殺してくれ。

「安在さん？」

「あ、はいっ。なんでしょう？」

顔をあげた安在がまたしても俺を睨む。

目つきは怖いのに敬語つて変だな。

「や、なんでしょうじゃなくて……俺、返事聞いていいかな？」

「そ、そうですね。すみません」

「すみません」の言葉に俺は安堵の息を吐いた。

「無理」ではなかったがきつぱり断ってくれたようだ。

「ああ、うん。やっぱりそうだな——」

「よろしく願います」

「突然呼び出して……ん？安在さん、いまなんて？」

「よろしく願います？」

一瞬、俺の思考が停止した。

そしてすぐに活動を再開する。

二度「よろしく願います」が聞こえた気がするが。

俺は額に手を当てて首を振った。

「聞き間違いだな。もう一回聞いていい？」

俺の質問に彼女は頷く。

制服のスカートを揺らしながらペコンとお辞儀がついていた。

「今日からよろしく願います、西嶋君」

俺、彼女ができたんだろうか。

しかもこんな美人の女の子。

……いいや！ちよおと待てー！！

こんな展開、俺は望んでいない。

誰か嘘だと言ってくれっ。

これは夢だ、これは夢だ、これは夢だ。
夢夢夢。

昇降口で念仏のように繰り返していた俺は、
「お待たせしました、西嶋君」
という可愛らしい声に頭を抱え込みたくなった。

告白から数分後。

俺は安在と一緒に帰宅することになってしまった。
「せっかく彼女になったんですから恋人同士っぽいことがしたいです」

意外な言葉にポカンとする俺をよそに、彼女は昇降口で待っていて
くださいと教室にカバンを取りに行ってしまった。

俺は振られてすぐに帰宅するつもりだったから、荷物はばっちり持
参していた。

状況が飲み込めないまま、安在に言われた昇降口に向かう俺の前に
巽が姿を現す。

「祝、初彼女」

言いながら右手を胸の前にあげるのはタッチでもしろってか。
嬉しくもないのになんでそんなことしなきゃいけないんだ。

「おまえまで見てたのか。ってか泰治は？」

右手をわきわき握っていた巽は、無理やり俺の手にタッチしてから
校舎のほうを指差した。

「悔しそうな顔で走ってったよ。まさかうまくいくとは思ってなかったんじゃない？男の嫉妬って醜いよね」

「俺だってOKされるなんて思ってたよ。いまさら冗談ですつつたら怒るかなー、やっぱり」

「いつもみたいに冷たく捨てるっていうのやればいいんじゃない？」

「人が聞いたら誤解を生むようなこと言うなっ！んなことしたことはないわっ。今日まで告白したこともされたこともないっつうの」

「航平って損してるよね、いろいろと」
溜め息混じりに巽に言われて眉を寄せる。

本当、こいつはたまによくわからないことを言う。

「泰治の前で俺も振られれば同類相憐れむっつうか——それで逆恨みしなくなってくれればって思ってたんだよ。なのに……安在って何考えてんだ？あれだけ俺のこと睨んどいてつきあうってわけわかんねー」

「女心と秋の空っていうでしょ。じゃ俺はこれで。今日から航平は安在さんと帰るんだろっし、俺は一人寂しく帰る」

「え？ちよつと待て、巽」

ヒラリと手を振った巽を呼び止めても立ち止まってくれなかった。

かくして俺は昇降口で安在を待って……そして現在に至る。

隣のクラスの彼女の下駄箱は俺のクラスの下駄箱の向かいだ。

上履きから靴に履き替える彼女を落着かない気持ちになりながら見ていた俺は、靴を履きかけた彼女がいきなり息を飲んで慄いたのでぎょつとした。

「どうかした？」

「に、にし、西嶋君……むむ、む」
はい？

わけがわからず近づく俺は安在が指差す床を見た。

スノコと彼女のローファーがあるだけだ。

「靴がなに？」

「む、虫、靴で潰しちゃった」

「え？虫？」

「その緑色の長い芋虫……。虫苦手な靴を触れない」

え、芋虫を靴で潰した？

靴に潰れなかった部分が蠢いてたらそれは俺もちょっと引く。

屈みこんで靴を覗き込んだ俺はつい笑ってしまった。

「もしかして目悪い？これ、虫じゃなくて毛糸」

俺が薄汚れた黄緑色の毛糸を摘み上げると、彼女は目を細めてそれを見つめ、やがてホツとしたように息を吐いた。

近くにあったゴミ箱に毛糸を捨てる俺は、安在が睨んできていた理由がわかって彼女を振り返った。

「眼鏡、持っていないの？」

「あります」

「じゃ、かければ？さっきまで俺、睨まれてるのかと思ってたし」

「え？睨……。ご、ごめんなさい。コンタクト、片方なくしてしまつて週末に新しい物を作りに行くつもりですから」

「うん。でも眼鏡かけないと危ないか？目、かなり悪いんじゃないの？」

頷く安在はごそごとカバンを探りケースから眼鏡を取り出すと、俺から顔を隠すようにそれをかける。

「なんで顔隠すわけ？」

「似合わないから」

「はあ？もしかしてそれが眼鏡かけてない理由？」

「すみません」

そう言つて俺を見た彼女の顔に淡いボルドー色の眼鏡がかかる。

「いつもと違つて優等生っぽくなるけど別に变じゃないじゃん。や

っぱ怪我したら危ないしコンタクト買っただけでかけてるほうがいいって。日常生活に支障きたしてるだろ、安在の場合」

「……呼び捨て」

「へ？——あつ、ごめん、つい。安在さんでした」

「呼び捨てがいいです。でも、できれば名字じゃなくて名前……雛姫って——」

言いながら安在の顔が赤くなる。

なんでそこで赤くなる？

ってか、うわなんだこれ。

こっちまで照れるって。

「名前……？いや、いきなりハードル上げすぎ。そこは安在で。それから安在も俺への敬語やめて。同い年だし」

「うん、わかった」

はにかみながら頷かれ、俺は彼女を直視できなくなった。

「かわ——」

掌で口をおさえ無意識に言いかけた言葉を塞ぐ。

しかし彼女に聞こえてしまったようだ。

「カワ？」

見上げてくる目に問われて心臓が口から出るかと思った。

よかった、手でおさえていて。

本当に彼女は俺と同じホモサピエンスか？

いや違うだろう。

こんな可愛いのに絶対俺と同じじゃない。

とにかく落ち着け俺。

「や、なんでもない。それより俺、電車通なんだけど安在は？」

「わたしも」

「そ。んじゃ帰ろう」

並んで歩きながら俺は全力で後悔し始めていた。

安在は泰治が言うような男心を踏みにじるような嫌な女じゃないと思う。

裸眼じゃよく見えなくて目を凝らした彼女の眼差しを、あいつは見下されたと勘違いしたんだ。

きつと告白を断られたショックで彼女を悪者にしてるんだろう。

そんな泰治の逆恨みをやめさせるためとはいえ、軽い気持ちで安在に告白した俺って最低じゃないか？

しかも安在をよく知らなかったときは観賞用と興味すらなかったくせに、実際の彼女を知ったとたん可愛いとか思ってるなんて、俺はどれだけ現金な奴なんだ。

ここは正直に真実を話すほうがいいんだろうか。

ちらと安在を見下ろせば、肩下で揺れる軽やかな髪や長い睫、少し赤みがさす頬なんてのが、いちいち俺を魅了する。

観賞用フィルターがなくなっただけ、俺の目は彼女のまぶしさに耐えられないみたいだ。

これじゃ安在を見て話ができない。

しばらくすれば彼女を見慣れるだろうし、その時にすべてを話そう。大事な話をするときは相手の目を見てするのが礼儀だ、うん。

「西嶋君、なに、かな……？」

俺の視線に安在は気づいたらしい。

まあ二人して話もせず黙々と歩いていれば、ガン見に気づかれて当たり前か。

「えー……」

言葉を探したけど結局何も見つからず首を振る。

「なんでもない」

「……もしかして、つまらない？」

「へ？」

「わたし、話もしなかったもんね。き、緊張して何を話したらいいか——あつ、でも緊張って言うても困ってるとかじゃなくてね。男の子とこうやって並んで歩くとか初めてだから……って、あああ何言ってるんだろう、わたし」

お約束どおりそこで恥ずかしそうに頬を赤くするのか。

いやもう、どんだけピュアなんだって話だな。

安在を陰で遊んでそうって言うてニヤけてた野郎がいたが、あいつらに鉄拳食らわしたい。

「話つて別になんでもいいと思うけど。昨日、何した。どんなテレビ見た。こういうのに興味ある。……そんな感じで。はい、どうぞ」

「え？わたしから話題を振るの？じゃあ一言ですまさないで話題を膨らませてね」

「努力します」

「なんで敬語なの……わたしが使うのヤダって言うたくせに」

あ、ちよつと拗ねた。

こんな顔もするのか。

「話してんじゃん、俺たち。無理しないでこんなんでもいいんじゃないの？ずーつと話してなきゃいけないってわけでもないし、沈黙になつたときは別にそれでもいいと思うけど」

「もしかして西嶋君、ここまで沈黙だったのも全然気にならなかったの？」

「え？安在気になんの？そりや嫌いな奴とだったら沈黙は気まずいけど。俺、一緒にいる奴と空間を共有してる空気とか好きなんだよな」

沈黙なんて巽といればほとんどそんな感じだ。

あいつが漫画ばっか読んでるって気もしないでもないが、そうじゃないときでもポツポツ会話してるだけで、ほぼ黙ってるってことがある。

俺と同じで巽も沈黙を楽しめる奴だ。

だから俺とあいつは馬が合うのかもしれない。

「そっか」

安在がふふと小さく笑う。

笑顔が嬉しそうに見えるのは俺の気のせいかな？

なんで喜ぶんだ。

女ってやつばわからん。

けどそんな彼女を見た俺の胸が小さく跳ねたのは、気のせいなんかじゃないはずだ。

駅まで通学路は生徒が帰り道に買い食いできる駄菓子屋がある。俺と安在がその前を通ったとき見慣れたリュックが見えた。俺はそれを横目で見つつも通り過ぎる。けれどすぐに安在が気がついた。

「あの、西嶋君？」

「なに？」

「後ろの人……」

「あ、俺のことは気にしないで」

「本人もそう言ってるし——って気になるわぁ！ 巽、おまえ一人で帰るって言ってなかったっけ？」

「一人で帰つてるところにたまたま航平と安在さんが来たんだよ。で、これまたたまたま俺の前を歩いてるだけ。わぁびっくり」

例のごとく棒読みで言われても説得力がない。

「西嶋君のお友達だよな」

「成山巽、18歳。スリーサイズは内緒。よろしく、安在さん。眼鏡かけると女教師みたいでいいよね。いろいろ想像がかきたえられる感じ」

おいこら、そこでグと親指を突き出すな。

「はい、よろしくです。成山君」

で、安在は意味わかってない……と。

天然か、天然なのか？

ベタなギャルゲー設定並みのキャラだったのか。

けどその設定、俺も嫌いじゃな……ゴホン。

巽が俺に向かって笑う。

なんだ、その「すべてわかってます」的な生ぬるい目は。

「え？なに安在さん。俺も一緒に帰ってほしいって？わかった。安在さんがそこまで頼むなら一緒にしましょう」

いきなり独り言を言っ、すまして俺の隣に並ぶ巽を覗き込むように見上げる安在は、クスと笑って眼鏡の奥の眼差しを俺に向けてきた。

「面白いね、成山君って」

「えと、こいつも一緒にいいのか？」

「うん」

「あ、航平。俺、本屋寄っていい？女の子雑誌も置いてあるし安在さんも行きたいよね」

駅前の本屋を目にした巽の足は既にそっちに向かっている。

「おまえは漫画を買いたいだけだろうが」

「学校帰りの寄り道は高校までの特権でしょ。満喫しようよ」

「成山君いつも漫画読んでるけど好きなの？」

「漫画は日本の文化でしょう」

本屋に入ると巽は漫画コーナーに一目散に消えた。

俺は安在を見下ろし雑誌の並ぶ棚を指差す。

「あっち安在が読むようなものがあるんじゃないか？」

とはいえ、俺は女の読むファッション誌なんてまるで興味もない。

所在なげに安在の後ろに控えていると、それに気づいたのか棚を移動した彼女は、ふと料理雑誌の前で足を止めた。

「西嶋君、明日お弁当作ってきてもいい？」

「え？」

「それ一緒に食べたいなって思って……だめ、だった？」

「や、俺いっつも学食かパンだから嬉しいけど」

「ホントっ？」

ばあ、と顔を輝かせる彼女に俺の胸がまたしてもドクンと跳ねる。
なんだこの嬉しくてたまらんって顔は。

さっきまでの笑顔も可愛いけど段違いじゃないか。

俺の心臓がドクドクと脈打ち始める。

ヤバイ、これはヤバイぞ。

「あのね。それから今度の日曜日、もし暇だったら一緒に図書館で勉強とか……ほんとに暇だったらでいいの」

「じゃケー番とメアド交換しとく？」

これ以上深入りはやめるともう一人の俺が叫ぶのに、なんで連絡先聞いてんだ！？

どうして携帯を取り出してしまっただ！？

冷静になって考える、俺。

話したこともなかった子と俺がつきあうことになって、しかも彼女はなんかやたらと積極的で、そのうえ俺の言葉にいちいち嬉しそうな顔になるって……ありえないっ！

夢よりありえないだろっ！！

でも。

「いいの！？」

って、一段と綻ぶ安在の笑顔は現実に俺の目の前にあって――。

「二人して連絡先交換してるの？俺も混ぜてよ。ハイ、安在さん赤外線」

書店の袋を手にほくほくと俺たちのところへ来た巽が素早く携帯を取り出した。

「ちょ、俺のがまだだっつの！」

「え、航平。俺のケー番ゲットしたかったの？早く言ってよ」

「おまえのなんてとづくに知ってるわ！」

「二人ともほんとに仲がいいね」

くすくす楽しそうに安在が笑い出す。

彼女に落ちない男がいたら見てみたい。
なんて可愛い顔で笑うんだろう。
もう嘘でも夢でも何でもいい。
告白してからたった1時間ばかりで、俺は彼女に完全にノックアウトされた。

* * *

次の日学校に行くと、俺と安在がつきあいだしたことは既に広まっていた。

一緒に帰るところを見ていた奴がいたし当然だ。
友達に冷やかされたけど肝心の泰治は俺に何も言ってこなかった。
それは俺が約束どおり安在を振ると信じてるからだろうか。

昼休みになって屋上で安在が弁当を広げた。

赤・黄・緑とカラフルな彩りで見るからにつまそうだ。

「おいしそうだね」

おい、巽。

その台詞はおまえじゃなくて俺が言うんじゃないか？

「本当？成山君も食べてね。たくさんあるから」

んで、さりげなくおまえのおばさんが作った弁当を俺によこすな。

「体育のあとの空腹ってハンパないんだよね。じゃ、遠慮なく」

「俺より先におまえが食うなよ。っていうかこれは返す。おばさん泣くぞ？」

「だから航平食べてよ。たまには学食やパンじゃなくて手作りのお弁当が食べたいでしょ？」

「俺は安在のを食べる」

「もー、わがままだな。じゃこれは安在さんにあげるね」

「え？わたしが食べるの？」

そこからは異と奪い合うようにして弁当を食べた。

だってうまい。

彼女が作ったからだという欲目を抜きにしても本当においしかった。それを素直に伝えると安在はまた俺が好きになった可愛い笑顔を浮かべた。

聞けば彼女は料理や菓子作りが好きで、大学も家政学科のある大学を目指しているらしい。

「ふーん、じゃ安西さん、航平と志望校離れちゃうね。家政学科のある大学って女子大でしょ？航平、理系に強い大学狙ってるよ。因みに俺は将来ネコ型ロボット作って、ネズミにも負けないストロングキヤットにするつもり」

「西嶋君は理系クラスだしわたしは文系だもん。進学先が違うつてわかってるしそれに――」

言いかけて安在は口を閉ざす。

「それに？」

俺が促すと彼女は微かに笑って首を振った。

「うつん。いまから先のこと考えたって仕方ないよね」

もしかして受験に失敗するとかか？

それは笑えないしシャレにならないだろ。

それとも目指す大学のレベルが高くて不安だったりすんのかな？
あ、だから昨日、日曜に図書館で勉強しようって言ってきたのか。
てことは色気のカケラもない誘いだってたわけだ。

デートっていうより勉強会だったんだなと俺が勘違いを正したところで、弁当を片付けた安在は次の科目の当番らしく先に教室へ帰っていった。

翻る彼女のスカートの裾を見つめてしまったのは、中が見えかけたからではけしてない。

「いま、もうちょっとだったのになーとか思った？このスケベ」

巽が首に手をかけのしかかってくる。

やめろ、暑い。

「んなわけあるか。つつかおまえどこ見てんだよ。」

「俺も健全な青少年だから。それにしても安在さん。性格悪い子には見えないよね。お邪魔虫の俺がいても嫌な顔一つしないし。――

そつか、航平はそこまで愛されていないのか。もしかして航平より俺に惚れた？俺がいい男すぎるばかりに……航平、振られるんだね」
俺はグイと巽を押しつけた。

「つきあいだしたばつかなのに縁起でもないこと言うな！」

「木戸にどう言い訳する気なの？」

前置きなく巽に突っ込まれて俺は、う、と言葉を詰まらせた。

「正直に安在さんが好きになったって言って、2、3発ボコられておしまいにすればいいでしょ？」

なんで俺が安在のことを好きになったってこいつにばれてんだ！？

「いや、もうばれましょう。6年目のつきあいだからね」

巽がしれつと答える。

俺の心を勝手に読んで会話しないでくれ。

ちよっとビビったぞ。

つつか、俺、そんなにわかりやすく顔に出てんのか？
てことは安在の前でも好き好きオーラ出まくり！？
それはさすがに恥ずかしすぎるだろう。

軽く咳払いして俺は表情を引き締めた。

「やっぱ落ち着けどころはそこしかないか」
泰治のことを思い出すと気が重い。

「この学校の七不思議がまた一つ増えたよね。安在さんが航平の彼女になったことにみんな驚いてたし」

「俺、騙されてんのか？」

「いままで誰に告白されてもOKしなかったのは、自分のことが好きだったからって思えばいいんじゃない？」

「そんな自惚れ野郎になりたくない」
ぼん、と巽が俺の肩を叩いて頷いた。

「いまのままでいようね、航平。この先なにかあったら骨ぐらいは拾ってもいいよ」

「俺が安在に振られんの前提かよっ」

突っ込みを入れた俺は金網にもたれて空を仰いだ。

「泰治の安い脅しに乗って告って——断られるって思ってたっての
は言い訳だろーな」

でも安在がOKするなんて本当にこれっぽっちも思ってたんだ。
だ。

「あっちーなあ。衣替え、来週からだっけ」
「そう」

話題を変える俺に合わせて巽が頷く。

安在のことや泰治との約束のことに、これ以上触れないでくれるの
がありがたかった。

きつと俺が本当のことを安在に話せば間違いなく振られるだろう。

けど彼女を好きになつてすぐに嫌われるつてのはさすがに辛い。

だからもう少しの間だけ夢見てもいいかな。

溜め息が出そうになるのを堪え、俺は眩しい太陽から目をそらした。

日曜日、待ち合わせたのは図書館の入口だった。

俺と安在は中学こそ違うけど隣の学区だったらしい。

二人の家は自転車で20分ほど離れていただけだった。

待ち合わせは午後からにしようかと俺が言つと、彼女は午前中からがいいと言ってきた。

お弁当を持っていくから近くの緑地公園で食べようとか言われたら……俺が領かないわけないだろう？

待ち合わせた時間より早く着いた俺はそわそわと安在を待つ。

ピロリロリンと携帯が鳴ったため確認すれば、『自転車置き場にきました』という彼女からのメールだった。

えーと、これはもうすぐ図書館に着くという連絡か？

俺は自転車置き場に向かう。

弁当を持っているなら大荷物だろうと思ったからだ。

図書館を回りこんだところで俺は安在とちょうど出会った。

「っはよ」

つて、なんじゃこりゃあ！

私服姿の安在を初めて見た俺はとっさに朝の挨拶をしつつも内心叫んでいた。

「おはよう、西嶋君。びっくりした。もう着いてたんだね」

彼女は俺を見て驚いた顔を笑顔に変えた。

フリルチュニックにハーフパンツなんて、よく見るファッションなのに彼女が着るとどうしてこうも違って見えるんだ。

なんか薄い素材で程よい腕の透け感とか、パンツから覗く素足とか。

グッジョブ！

……でもこれ、見ていいのか？

ついでに言えば、学校ではおろしている髪のサイドをゆるく編みこんで、後ろはふわふわのまま流すようにヘアアレンジしてある。もうこれ持って帰りたい。

か、可愛すぎる。

「どうかした？」

はっ、うつかりまた見惚れていた。

「や、眼鏡してないしコンタクト買ったんだなって」

「うん、昨日」

「安在が気にするほど眼鏡変じゃなかったけどな」

「ホント？眼鏡嫌いじゃないの？」

「嫌いも何も俺、目はいいからかけないし」

「そういう意味じゃなくてね？」

「うん？あ、伊達眼鏡とか？服とコーディネートしてかけてる奴いるけど、俺、そういうのはしないな」

なによりそこまでおしゃれじゃない。

今日だってジーンズに黒T、アウターがわりのシャツって、男にありがちな面白味もない服だと思う。

一応、シャツは一番のお気に入りを選んだけど。

ん？なんか安在の顔が困惑してないか？

ひょっとして俺の今日の服装どっか変とか？

やばい、どこがおかしいのかさっぱりわからん。

色か？組み合わせか？

……俺、安在の横に並んでいいんだろうか？

一抹の不安を覚えつつ、そんなことはおくびにも出さない俺を、巽あたりが見たらいいカッコしいだと笑いそうだ。

笑いたいなら笑え。

俺も男だし彼女の前じゃちょっとはカッコつけたい。

「荷物、かして。持つ」

「え、あ……いいよ」

「弁当とかあつて重そうだから」

ん、と手を出しながら安在が気を遣わなくてすむような、もっと気の利いた言葉を言えたらいいのと思う。

迷うような素振りの後、彼女に差し出された大きなカバンはずっしりと重かった。

「うわ、重っ」

「ご、ごめんね。参考書とか入ってるから。あ、勉強道具は別のカバンに分けて一緒に入れてるだけだから、それをわたしが持てば――」

「じゃなくてよくこんな重いもん持ってここまで来たよなって思っ
て。けっこう力持ちなのな？」

肩にひっかけ来た道を戻る俺の後を、彼女が小走りに追っかけてくる。

「西嶋君、カバン出してっば」

「図書館まですぐじゃん。それより弁当のメニュー何？」

「唐揚げと出汁巻き卵と牛肉のアスパラ巻き――」

「アスパラの牛肉巻きだろ」

「あれ？そう言わなかった？」

「逆言った。アスパラは昨日食ってうまかったやつだ。唐揚げと出汁巻きは別の日に入ってたよな。俺、好きなんだ」

「あ、よかった。やっぱり好きなんだ」

「え？」

「だってそれ、お弁当に入れてったら先に食べちゃったし好きなのかもって。やった……当たってた」

ふふ、と笑う安在を見ながら俺は驚いていた。

そんな些細なこと見てんのか。

なあ、こんなこと言われたら勘違いすんだけど。
もしかして俺のことが好きなんじゃないかって。

「っあ……」

図書館の中に入ると連日の暑さからか冷房がきかせてあった。

「涼しい」

彼女の声に俺は我に返って開きかけた口を閉じていた。

おいおいおい、俺いま何を確認するつもりだった？

まさか俺のことを好きかどうか尋ねるつもりだったのか？

冷静になれ、俺。

まずそれはない。

数日前、初めて話した男のことが好きなのわけあるか。

じゃあ、なんで俺とつきあうことをオッケーしたんだって思うけど、
それを尋ねる勇氣は俺にはない。

彼氏っていう響きに憧れがあったとか、とりあえずつきあってみた
とか、きつとそんなところだろう。

告白してすぐ振られなかったのは、これまでの奴と違ってちょっと
は俺に興味を持ってくれてるってことかもしれない。

でも合わないやすぐに別れるとか思ってたらしないだろうか。

……なんて自分の考えにへこんだ俺ってどんだけヘタレなんだか。

図書館には学習室というのが設けられていて、そこなら少しくらい
声を出しても書架とは離れているので問題はない。

あまり広い部屋ではないから席は早い者順に埋まってしまっけど、

午前中から出向いてきたこともあってまだ空席の方が多かった。

4人掛けの机に俺が向かい合わせに座ろうとしたところで安在が俺の服を握る。

「隣」

「え？隣？」

もじもじとなんか恥らってるけど。

で、次の瞬間。

「数学教えてもらっていい？ぜんっぜんわからないの。中間、赤点だったのにこの期末も赤点とっちゃう。このままじゃ留年かも……」
あ、なるほど。

赤点暴露が恥ずかしかったのか。

「留年？そこまでひどいの？」

「ひどいんです。だってどこがわからないのかもわからないのー」
ははは、たまにいろよな、そういう奴。

これってもしかして中学からやり直しパターン？

遠い目をした俺を見て安在が萎れたように言う。

「馬鹿でごめんなさい」。西嶋君の受験勉強の邪魔しなくなかったけど、期末の赤点を避けられるくらいに叩き込んでください」

というわけで俺の右隣に安在が座って勉強開始。

このほうが右利きの彼女の書いたノートが見やすい。

んで、目の前に参考書と教科書がドンと重ねられた。

「気のせいかな、高1と高2の時の教科書まであるけど？」

「どこからわからなくなったのか突き止めようと思って。躓いたところからやり直せばなんとかなるでしょ？それでも中学までは数学わかってたの」

そうか。

原因究明するのか。

文系なら入試で数学は不要だったりすることもあるのに、根が真面

目なんだなあ。

まあでも、中学からやり直しは避けられそうだ。

「西嶋君、お茶。はい、どうぞ」

「ありがと」

図書館の隣にある緑地公園のベンチで弁当を広げ、俺は手渡された茶で喉を潤した。

二人の間に並べた弁当は今日もうまそうだ。

唐揚げをとつてもりもり食べていると、彼女はペコンと頭を下げてきた。

「ヤマまで張ってくれたし期末、なんとかかなりそうです」

「そりゃ良かった」

「関数とか証明とか自分の苦手なところもわかったのも嬉しい。ほんとにありがとう」

「受験に数学いんの？」

「選択で省けるけど。でもまったくわからないまま卒業したくなかったの。西嶋君の教え方わかりやすかった。おバカなわたしでもわかったもん」

「安在、馬鹿じゃないって。たぶん苦手意識が先立つてるだけじゃん？問題こなせば大丈夫だと思うけど」

「ホント？よし、じゃあ頑張る。でも午後からは受験勉強もしなきゃね」

箸を持ちながら両手を拳に握る安在は、このままずっと勉強をするつもりだけのようだ。

ちよっと公園を息抜きに見てまわるとか、そういう彼氏彼女のデートっぽいことはやっぱないわけか。

「そついや安在つてどこ志望？」

「わたし？んーとね——」

お互い第一志望の大学を言い合えばけっこう近いことが判明し、後は他愛もない話で昼食は終わった。

図書館に戻ったところで安在は建物の外にあった自販機で、俺がいつも飲んでいた紙パックの苺ミルクを買って、数学を教えてもらったお礼と奢ってくれた。

「なんで苺ミルク……」

「え？だってよく飲んでるから」

もしかして見られてたのか！？

俺とのつきあい長い巽は慣れてるけど、他の友達にはコレ買うと笑われるんだ。

女がよって。

まさか、安在もそんなこと思ってたらしないか？

「西嶋君つて甘いの、好きなの？」

「けっこう。うちの母親と姉ちゃんが甘い物好きで、普通んちよりケーキ食べる頻度は高めじゃないかな。俺はどっちかってえと甘さ控えめなケーキが好き」

「お姉さん、いるんだ？わたし、弟」

「ああ、俺も弟いる。俺、3兄弟の真ん中だから——ありがと、もらっ」

ちゅー、と苺ミルクを飲んだ俺は、物言いたげな視線に気づいて彼女に目を向けた。

「お菓子、作ったら食べてくれる？」

「食べる」

即答した俺に安在は嬉しそうに笑う。

「甘さ控えめ、ね？」

「ん。けど、弁当とかお菓子とか材料費バカになんないだろ？今日も弁当食べといていうのもなんだけど無理ない程度で——」

「もしかして迷惑だった？」

とたんにしゅんとする彼女に俺は大きく首を振った。

「それはないつ。弁当はうまいしお菓子だって食べてみたい。そこは誤解なしで！！ただ、毎日はやっぱり悪いってか……材料費だけでなく、弁当作るのに早起きしなきゃいけないだろ？」

見上げてくる目はまだ納得しきつてないように見える。

どうにかわかってもらおうと俺は言葉を続けた。

「受験生なんだしその時間を勉強か睡眠に充てたほうがいいと思う。だから時々で充分」

「せっかく彼女なのに」

少し口を尖らせてるのは拗ねてる？

それがまた可愛いってアリか？

「せっかく彼女なのに」ってのは、「彼女っぽいことがしたい」と同意だろうか。

それなら俺だって彼氏っぽいこと……ていうかつきあってるっぽいことしたいぞ！

そういうこと俺が望んでも引かれないかな？

「あの、さ。もっかい公園戻って散歩——」

「え？」

あ、やっぱり引かれた。

あくまで彼女っぽいことがしたいだけで、俺とどうしたいってわけじゃないのか。

すみません、調子乗りました。

「——とかはしたくないよな。勉強しに来てんだし」
「行く」

「へ？」

「行きたいっ」

耳と疑った俺だけど、見下ろす安在の顔が嬉しそうに破顔したから、聞き間違いじゃないんだろう。

うつしゃ、と気持ち的にはガッツポーズをしながら俺も笑う。

苺ミルクを一気に飲み干した俺は紙パックをゴミ箱に捨てると彼女を振り返った。

空の弁当箱や水筒が入ったカバンと自分のバッグを纏めて持ち、空いた手を差し出してみる。

こんな大胆なことができたのは、きっと彼女とデートができることに有頂天になっていたからだ。

「繋いでく？」

でも嫌そうな素振りを見せたらすぐに手を引つ込めよう。

……やっぱり根はヘタレだ、俺。

「うん」

照れくさそうな顔をしながらも伸ばされた手を握って、俺はその柔らかなさに本気で驚いた。

強く握ったら折れるんじゃないか、これ。

しかも彼女の緊張が俺にも伝わってきて……うつわ、今更ながらにこっぴどかしいっ。

「な、なんか照れるね」

「言っな」

「あ、ごめ……」

「余計に緊張する」

「嘘、西嶋君も緊張してるの？沈黙へいきなのに」

「それとこれとは別」

歩き出した俺に彼女は一瞬遅れてついてくる。

ちらと彼女を見れば俺を見ていたのか目が合った。

互いに勢いよくそらしてもう一度窺うとまた目が合う。
そのせいで二人して噴出していい感じに力が抜けた。

「西嶋君の手おっきいね。公園まわってる間、繋いでていい？」
そんなのいいに決まってるっ！

どれだけ彼女は俺を喜ばせる気なんだろう。

返事の代わりに繋いだ手に少し力を込めると、俺の隣で安在はありえないほど可愛く笑った。

「なーなー、航平。どうなってんの？いつになったら実行してくれるわけ？」

ちっ。

とうとうきたか、泰治。

俺が安在とつきあいだしてから二週間が過ぎている。

そろそろ何か言ってくるとは思っていたんだ。

朝っぱらから屋上まで連れてこられたけど、俺はいつも始業ギリギリに登校するからもうチャイムが鳴るんじゃないか？

そう思ったところで校内にチャイムが鳴り響く。

このまま教室に戻る……ことはできそうにないか。

俺は腹をくくって泰治を見つめた。

「それ、無理。俺にはできない」

「はあ、なんでだよ？」

「俺が安在を好きだから」

おお、目が落ちそうなほど見開いてるなあ。

殴りかかってくるかと思ってたけど、それよりびっくりしたって感じだ。

「安在見ててわかったけどおまえが言うような嫌な女じゃない。泰治は見下されたって言ってたけど、あれ、目を細めて物をよく見ようとしてただけだぞ？ちょうどコンタクトなくして裸眼じゃなんも見えてなかったからだ」

「航平、俺を裏切んのかよ？」

俺が仲間だったみたいない言い方するな。

脅して引き込んどくせに。

「最初っからいやだっって言っただろ？」

「おまえ、わかったつつったじゃん」

「告って俺もおまえと同じように振られれば、そこでおまえが考えを改めると思っただよ。俺だっつまさか安在がOKするなんて思っただけだ」

「今更言い訳かよ。で？自分の彼女になったとたん惜しくなっただ？そりゃあれだけの女なら連れて歩くだけで自慢だよな」

「自慢？んなつもりねえよ」

安在を商品か何かのように言われてカツとなった。

そんな俺にどうだかというような目を向け、泰治は顔つきを一変させる。

「おまえって昔からそうだよ。人の良さそうなそぶりみせてやたら正論並べ立てんの。んで自分は悪くありませんって——もう、それ偽善者っぽくて最悪だよな。俺、おまえのそういうところすげえムカついてた」

「偽善？おまえに俺がどう見えてるか知らないけど——そもそも安在のこと逆恨みしてんのは泰治だろ？んな腐った根性の奴に俺のことととやかく言われたくない」

俺は普段は争いは避けるけど、こんな風に避けられない状況なら売られた喧嘩は買うほうだ。

「ざけんなよ。」

「なんでここまで言われなきゃならないんだ！！」

「まず己のやろうとしたこと省みて海よりも深く反省しろっつ、このボケ！」

泰治を睨み返して臨戦態勢に入ると冷たい視線が返ってきた。

「おまえが俺の話に頷いた時点で共犯だろうが」

俺を押しつけ過ぎざまに言われた台詞に返す言葉が見つからない。

「なのにそれに目えつぶって、自分を正当化しようとするところが偽善だっつってんだ」

目で追った先で振り返った泰治がニヤリと笑った。

俺は呆然とそれを見つめるしかできない。

「俺、おまえのことがガキのころから大嫌いなんだよ」

捨て台詞を残して泰治が校舎に消えた。

ガキの頃から大嫌いって……。

俺と泰治は幼稚園からのつきあいで、小学生の時は毎日のように遊んでたし――。

「嘘、だろお……」

その場に座り込んで俺はうつむく。

まさか10年以上も俺は泰治に嫌われてたんだろうか？

そう思うとさすがへこんだ。

こんなんじゃ授業に出る気になれない。

ああもういい、今日はサボろう。

投げやりな気分になった俺は塔屋の影に移動して座り込んだ。

泰治とはこれっきり縁が切れてしまっただろう。

心底嫌そうに大嫌いと言われた相手と仲良くしたいと思うほど俺はマゾじゃない。

中学で疎遠になったのは俺があいつに避けられたからだっただけな。

自分の考えにまたへこんで、壁に背を預けながら長々とした溜め息を吐いた。

泰治の件は片付いたと思えばいいだろ、俺。

これで安在と大手を振ってつきあえるんだから。

目を閉じた俺の心に、ふとあることが思い浮かぶ。

俺が安在に告白した理由なんて、べつに彼女に話さなくてもいいんじゃないか？

なぜかいままで正直に話す気になっていただけで黙っていたっていい話だ。

告白した時はどうであれいまは彼女のことが好きだし、自分から嫌われるようなことをしなくても……。

そうだ、俺の良心がちくちく痛むなんてのはちょっと目を瞑ればいい。

安在のことを大切にして彼女に好かれるよう頑張るほうが、精神的にも穏やかでいられる。

「……って駄目かなー。やっぱ」

「ダメって何が？」

目の前に巽がしゃがみこんでいたことに驚いて俺は声をあげた。

「うわっ、巽！？」

「おはよ」

や、と手を上げる巽は相変わらず飄々としていて表情が読めない。

「な、んでここに」

「HRの途中で木戸が教室に入ってきたんだよ。で、航平のカバンはあるのにいないままだから、もしかしてあいつに呼び出されたのかと思って探しにきた——授業、始まるよ？」

「いい、サボる」

「ボコられて動けない？」

「そんなんじゃないからおまえは教室戻れ」

「わかった」

すく、と立ち上がって巽が消える。

扉の開閉音に俺は額をおさえた。

なにやってんだ、俺？

心配して探しに来てくれたあいつを邪険にあつかってこれじゃ八つ当たりだ。

しばらくして一時間目が始まるチャイムが鳴った。

自己嫌悪に陥った俺の前髪をぬるい風が揺らしていく。

休み時間になったら帰っかなあ。

いや、でも今日はまだ安在を見ていない。

俺がたまにでいいと言ってから弁当は毎日じゃなく、数日置きに作ってきてくれるようになった彼女だ。

今日は安在の弁当の日だしそれは食べたい。

なにより彼女の顔を見れば元気になれる気がする。

そこへ塔屋の扉が開いた音がした。

俺と同じサボリ組みかと思ったところで、カバンを手に巽が現れた。

「巽、おまえ教室戻ったはずじゃ？」

「うん、戻ってこれ持ってきた。航平はこれ」

カバンから少年誌を取り出しそのまま布製のそれを俺に手渡す。
中を見ればジャージが丸まって入っていた。

「ジャージ？」

「じゃなくて枕。それをこうやって頭に敷いて目を瞑ればあらず思議。数秒で夢の中という未来のネコ型ロボットがくれそんな快眠アイテム」

「なに？俺に寝ろってか？」

「そう」

「なんで？」

俺の隣に腰を降ろした巽は雑誌を広げながら言った。

「やなことあつてもぐっすり寝ておいしい物食べたら元気になるでしょ？お昼は安在さんのお弁当が待ってるしそれまで寝てれば？染みつけても怒んないよ」

「涎なんか垂らすか！」

「ふーん、航平って目から涎垂らすんだね」

ぺら、と雑誌を繰りながら巽に言われ俺は思わず顔をおさえた。
いや、どこも濡れてない。

「心配しなくても泣いてないよ。だって男の子だもん」

おい巽、そのまま沈黙しないでくれ。

どう突っ込んでいいかわからん。

俺は手にしたカバンを見つめ、しばらくあつて屋上に寝転がった。
巽の言動を理解しようとしたって俺には無理だ。
目を閉じたところで巽の声がした。

「今日のお弁当のおかずはハンバーグとコロッケだって」

「なんでおまえがそんなこと知ってたんだよ？」

「俺、安在さんとメル友だから」

はあっ？いつの間に！？

ぎょつとして目を開けると巽が俺に向かってピースしていた。

「俺ってすごいよね」

「悪かったな、マメじゃなくて」

もともとからしてメールを頻繁に使う人間じゃないし、書いたとしてもほぼ要件のみだし。

けどこれでも安在からのメールにはちゃんと返信するようにしてるんだ。

や、返信つつつても簡潔なんだけど。

んで俺からメールしたことはほとんどない……――。

だめじゃん、俺。

安在に冷たい彼氏って思われてんじゃないかって気がしてきた。

「うん、まあマメとかそういう話でもいいけど」

なんか別の意味で言ったのか？

じゃあなにがすごいんだ。

そう思ったが問い返す気にはなれなくて俺はもう一度目を瞑った。

巽が雑誌を繰る音やグラウンドからホイッスルの音がする。

制服が半袖に替わったからか、屋上に寝転がると腕に小石が当たって地味に痛いな。

俺は小石を避けるように胸の上で腕を組みつつ、制服の背中側が汚れてるだろうと、そんなどうでもいいことを思った。

* * *

カシャ、と電子音がしたことで俺は気がついた。
いまのはなんの音だ？

それに間近に人の気配がする。

異か？と目を開けると、安在の顔があって俺は飛び起きた。

「あ、起きた。おはよう」

「安在？なんでここにいてるわけ？もしかしてもう昼！？」

「ううん、まだ。成山君にメールもらったの。西嶋君が屋上で討ち死にしているからって——寝不足？それとも気分悪いの？」
心配そうな顔になる彼女に俺は慌てて首を振った。

「ちよつと気分的にダレてサボってただけだから。それより異は？」
雑誌を読んでいたはずの異がない。

「別の漫画を持ってくるって教室に行っちゃた。すぐ戻ってくると
思う」

携帯で時間を確認すれば3時間目が終わったばかりの時間だった。
俺、マジ寝してたのか。

塔屋の影は随分と短くなって足元は日の光にさらされてる。
どうりで暑かったはずだ。

「よいしょ」という安在の声に俺は目を向けた。

日陰に座り込んで見慣れた大きなカバンを脇に中身を取り出そうと
してる。

「何してんの？」

「少し早いけどお弁当の用意。うちのクラス、次は自習になったからわたしもここにいます」

「や、いくら自習でも教室にいないとマズイだろ」

「じゃあ西嶋君は？」

尋ねられて俺は言葉に詰まった。

「何かあったの？」

重ねて尋ねてきた彼女の顔が曇ったため俺はとっさに笑顔を作る。

「わかった。ちゃんと授業受ける」

「西嶋君、わたし授業に出てとかそういうつもりじゃなくて――」

「ちよつとやなことがあつて不貞腐れてただけだから」

「嫌なこと？」

「ん。でも寝たら復活した」

「ほんとに？」

「ほんとほんと」

立ち上がった俺は制服の汚れをはたき、巽の枕代わりのカバンと安在が持つてきた弁当入りのカバンを手にして、彼女を見下ろした。

「心配してくれてありがとな」

俺を見上げる安在がやっとホッとしたような顔になった。

並んで階段を下りながら俺はチラを彼女を盗み見た。

柔らかそうなふわふわの髪がいつものように軽やかに揺れている。

この髪に触れたいと思った。

手を伸ばしかける俺は、けれど寸前でやめた。

いまのままじゃ触れられない気がしたからだ。

やっぱり彼女に全部話さなきゃいけないんじゃないか？

でないと俺はずっと後ろめたい気持ちを持ち続けて、安在と接し続けなくてはいけなくなる。

そしてその気持ちがある限り彼女に触れられない気がする。

そんなのは嫌だ。

手を繋いだとき自分でも馬鹿になったんじゃないかと思うくらい嬉しかった。

また繋ぎたい。

彼女と向き合って心から笑いあいたい。

俺はぐ、と手を拳に握った。

安在にすべてを話して、その後はちゃんと謝ろう。

そしてもう一度、彼女に好きだと伝えよう。

振られるかもと弱気なことが頭をよぎるのを無理やり無視する。

ちょうど3年のクラスが続く2階に降り立ったところで俺は彼女に呼びかけた。

「なに？」

俺を見つめる眼差しは無邪気で優しい。

「放課後、ちよつと話しがあるんだけどいいかな？」

俺がこう言ったとたん安在の顔色が見る間に変わった。

「話って？いまじゃ、駄目なの？」

「ん、大事な話だから」

「そ、そっか」

明らかに作り笑いとわかる笑顔を浮かべる彼女はなぜか泣きそうだなんでこんな顔するんだ？

「安——」

「あれ？自主休講はもう終わりなの？もつと青春を謳歌しようよ」

数冊の漫画を手に異が現れ、俺たちの微妙な雰囲気気づいたのか眉を寄せた。

「どうしたの？」

「な、なんでもないよ？あ、じゃあ西嶋君。4時間目が終わったらいつもみたいに——」

取り繕う安在が不自然に言葉を途切れさせたため、俺は彼女の視線を追って後ろを振り返った。

見れば薄ら笑いを浮かべた泰治がこちらに近づいてくるところだった。

「よお航平、もしかして授業サボってたのは彼女と校内デートするためか？」

俺たち3人の側に立つ泰治を見て俺は嫌な予感がした。

「安在、巽と先に教室戻ってくれ」

俺の言葉を受けて巽が彼女を呼ぶ。

「行こっか、安在さん」

「え？あ、うん」

「ちよつと待つて、安在。俺、面白い話知ってるんだけどさ」

言いながら泰治はチラと俺に視線を向けて笑った。

こいつ、話す気だ。

直感的に思っただけ俺は泰治の腕を掴む。

「黙れ、泰治。——巽、安在連れてけ」

「なんだよ、俺が悪者みたいじゃね？俺はただ真実を安在に教えてやろうとしてるだけだろ」

「黙れつつてんだろが」

俺が安在に話すことなんだ。

他人の口から伝えられたくない。

泰治は俺の手を力任せに振り払った。

「はっ、必死だな。安在、よく聞けよ。こいつがおまえに告ったの
つて——」

「知ってる」

泰治の声を遮る安在の言葉に俺は一瞬眉を寄せる。

知ってる？

……何を？

彼女はさっき見せた泣きそうな顔で微笑んだ。

「——全部知ってるよ、わたし」

俺は驚愕のあまり息を飲んでいた。

7 離姫視点

わたしの目が悪くなり始めたのは中学に入った頃からだ。
3年間ずっと眼鏡をかけていた。

亡くなった曾祖母が西洋人で、ひ孫のはずのわたしはなぜかその血を色濃く受け継いでしまった。

瞳や髪の色が薄く顔立ちだって日本人とは言い難い。

小学生のときそのことをからかわれ、自分は一つ間違えば人から省かれる外見をしているんだと知った。

それからわたしは極力目立たないように思うようになって、いつも顔を隠すようになってしまった。

きつと目にかかるほど前髪を伸ばしていたことが視力を落とした原因だろう。

そんなわたしにとって眼鏡はいいアイテムだった。

分厚いレンズとそれを支える縁の太いフレームは、顔を隠すのに役立ってくれたから。

もともとわたしは活発ではなかったし、自分からなにか率先してやるタイプではなかったので、きつと仲の良かった子以外、中学の時の同級生の記憶には薄い存在となっているんだろう。

それでいいし、そうやって生きていくんだと思っていた。

* * *

「雛姫！もう合格発表張り出されてる時間だよ。急がなきゃ」

「ひな、置いてくよ」

「ま、待つて。わたし足早くないし走ったら眼鏡がズれるから……」
中3の冬。

受験した高校の門をくぐって、息も絶え絶えに訴えるわたしを彼女らは無情にも見捨てた。

「も、あんたは後でゆっくり来な」

「先行くからねっ！」

あ、ひどい。

本当に置いてった。

二人は元陸上部と元バレー部だもん。

そりゃ体力に自信あるんだろうけどわたしは元料理部。

つまり文科系ではつきりって運動音痴だ。

もう歩いちゃおうかなあ。

でも早く合格発表を見て家と学校に連絡しなきゃだし。

一瞬の葛藤の末、走り続けることを選んだわたしは足元を見つめる。
頑張れ、わたしの足。

一歩一歩確実に。

マラソン大会でも同じことを思ってた走りきった記憶を辿り自分に喝を入れた。

マラソン大会より全然距離は短いもん、大丈夫。

唇から息を吐くたび白く煙り消えていく。

肩から落ちてきたマフラーを巻きなおしたところで、

「うわ、ちょ……前見て、前」

知らない声に顔をあげたときには遅かった。

人がいる！

相手の人はうまくわたしを避けてくれたけれど、よれよれ走っていたわたしは電灯の柱にぶつかっていた。
いったあい！

急ブレーキをかけるように足を踏ん張ったのに。
額を押さえつつ目を瞬くわたしは、眼鏡がかるうじて顔に引っかかっていることに気づいた。

「大丈夫……、か？」

控えめにかけられた声にわたしは我に返って、斜めを向いている眼鏡を慌ててかけなおした。

もうなにこれ、コント！？

恥ずかしさに急激に顔が熱くなってくる。

声をかけてくれた相手に目を向けたわたしは、ファスナーが開いたコートからのぞく学ランに気づいて硬直した。

男の子だ！

異性というだけで緊張してしまうわたしは、そのまま凍りついたように顔をあげられなくなった。

かといってこのまま相手を見ないのも変じゃないかな。

あ、そうだ！

とつさにいい考えが思いついてわたしは頭をさげた。

これなら顔をあげなくてすむ。

「だ、大丈夫です。ごめんなさい」

勢いよくお辞儀をしたせいか眼鏡がズレてくる。

「や、俺は平気だけど……怪我は？」

「ないです」

「でもゴンって音してたし」

いやあああつ。

そんないい音響かせてたの、わたし！？

恥ずかしすぎる。

「いえ、ほんとに平気ですからっ！」

「そっか」としばらくあつて相手の靴が動くのが見えた。

このまま立ち去ってください。

そんなことを思いながらわたしはまたしてもズレる眼鏡を直す。少しフレームが大きめだったからよくズレる眼鏡だったけれど、いつもより鼻を滑るのはどうしてかな。

……あれ？

左の蝶番のところグラグラしてない？

「嘘、壊れた!？」

眼鏡を外して確認するとフレームが歪んで、今にも蝶番のところまで折れてしまいそうだ。

これ、眼鏡屋さんで直せるのかな。

新調しなおすことになったらお母さんに叱られるー。

ていうかこの眼鏡かけてても大丈夫？

そうつとわたしが眼鏡を顔にかけ直したところで声がした。

「なんか、壊れたって聞こえたけど？」

「え？」

振り返ってわたしは飛びのきそうになった。

知らない男の子がいるっ！

「眼鏡、平気？」

この声、さっきの人だ。

わたしが壊れたって言ったから戻ってきてくれたの？

「だ、ただ大丈夫です——ほら、この通り……あっ」

わたしが眼鏡を外した瞬間、金具がパキと小さな音を立てて折れてしまった。

わたし、いま自分で止めをさしちゃった？

「お、折れちゃった」

「眼鏡なかったら合格発表の番号見えないんじゃないか？それとも

もう見たあと？」

「まだ見てないです。でも片方の柄の部分は生きてるからこうやって手で持っていれば——」

右側のテンブルを耳に引つ掛け彼に向き直ったわたしは、まともに目が合つて慌てて目をそらした。

あ、嫌な態度とっちゃったかな？

誤解しないで。

初対面の、しかも男の子相手だから緊張してるだけなの。胸中でいくら言い訳したって彼に伝わるはずもない。

「でもグラついてるじゃん？なんなら俺、一緒に行くけど？」

「え、一緒に？」

「ん、だってそれかけて歩きにくいだろ？」

「そんな。悪いしいいです。友達がいますから」

「友達？どこにいの？」

「合否が知りたくで先に走って行っちゃって——わたしさっき、それを追っかけてたんです。えと……眼鏡は外してゆっくり歩いていきますから大丈夫です。それにこの眼鏡、少し大きめだからグラついてるだけで……あの、いつもよくズレてきてたし」

緊張のため余計なことまでぺらぺらとしゃべってしまふ。変な子だって思われたらどうしよう。

そう思うと余計に焦って緊張も高まり、頬がどんどん熱くなる。たぶんわたし、顔が真っ赤だ。

走ったせいだって思ってくれないかな？

「それさ」

「え？」

「眼鏡似合っていないんじゃない？外しとけば？」
に、似合っていないから外せ？

確かに顔を隠せるようにってレンズ部分が大きな眼鏡にしたけど。

弟に「ダッセえ」と言われ続けてる眼鏡だけどつ。

友達に控えめに他の眼鏡もいいかもよって言うのよ？

他人なら気を遣ってそう言うと思うのに。

……初対面なのにはつきり言う人だなあ。

わたしと正反対の人みたい。

「でも目が悪いわたしには必要で——」

「コンタクトないの？」

そんな顔が隠せなくなるものをわたしが持つてるはずもない。

「持つてないです」

「あー、まあそっか。眼鏡かけてんだもんね」

もしかして眼鏡が嫌いなのかな？

遠近感が掴みにくくてやだって人いるもんね。

てことはこの人も目が悪いのかな。

コンタクト？

でも眼鏡かけても似合うと思うんだけどな。

かっこいい人だもん。

いいなあ、わたしの憧れの日本人らしい黒い髪に黒い目してる。

声もいいよね。

凜としてるっていうか、よく通りそう。

メタリックな細いフレームをかけたらどうか？

ちよっと優等生ちつくになってそれはそれでまたかっこいいかも！！

……ん？かっこいい？

そこで、はたと我に返ったわたしは悲鳴をあげそうになった。

なんで地味なわたしがこんなモテそうな男の子とお話してるのお！？

うつん、それよりも！

学校じゃ男の子に見向きもされないわたしに、どうしてこの人は普通に話しかけてくるの！？

もしかしてわたしが眼鏡を壊して困ってたから？
うん、きつとそうだ。

この人すごく優しい人なのね。

「モテそう」じゃなくて、絶対学校で「モテる」んだろうなあ。

あ、だから女の子と話すのも慣れてるのかな。

「俺がつきそうにしてもちよつと待ってもらっていいかな。友達が親に合格した連絡するって携帯持ったままどこかに……またどっかで漫画読んでんじゃないだらな」

合格発表もう見たんだ。

「合格……」

「へ？」

「あの……合格したんですか？」

つて、思わずなに聞いちゃってるの、わたし！？

「あ、俺？——うん。春からこの1年」

そう言った彼が堪えきれない様子で嬉しそうに笑う。

笑……った？

その顔を見た瞬間、わたしの胸がドキンと跳ねる。

嘘、なんかイメージ変わる。

ちょ……この人、笑顔が可愛い。

男の子に可愛いって嫌がられるかもだけど——やだ、胸がドキドキするう。

「ひーなー！もう遅い！」

いきなり遠くから大声で名前を呼ばれてわたしは驚いてそちらを向いた。

「合格発表あんたの分も見てきてやったよー」

「皆合格！続き番号誰もぬけてないっ。嬉しい」。また3年一緒だねえ」

冷たくわたしを見捨てたはずの友達が、満面の笑顔で手を振って駆

けてくるのがわかった。

「友達？」

彼が二人からわたしに目を向け尋ねてきたため頷いた。

「そっか。やったじゃん。合格、おめでと」

「あ、合格……え！？わたし、合格！？」

「じゃないの？友達がそう言ってたんだし」

遅れて合格の言葉に反応するわたしに彼はクスリと小さく笑った。
わ、また笑ってる。

「俺がつきそわなくても大丈夫そうだな——あ、あいつあんなところに……んじゃ俺はこれで」

立ち去る彼の背中を見つめるわたしは、後ろから友達に飛びつかれるまてぼうつとしてた。

「ちよつとひな、いまの誰？知り合い？ちよつとよくない？」

「知らない……」

「知らない？雛姫、いつも学校の男と話すのも緊張してるのによく——って何！？あんた、その眼鏡壊れてない？」

「あ、ホントだ。まさかあいつに壊されたの？」

「え？違うつ。あの人わたしは眼鏡を壊して困ってたから助けてくれようとして……あ！わたしお礼も何も言ってる。合格おめでとうって言うてくれたのにい……」

わーん、わたしの馬鹿。

せめて「ありがとう」って言えばよかった。

後悔したけれど後の祭り。既に彼は人に紛れてわからなくなっていた。

4月、あの人に会えるんだよね。

そしたら名前だってわかるよね。

もしかしたら同じクラスになれるかもしれない。

春に会ったときあの人わたしのこと覚えててくれるかな。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9030y/>

嘘つきは誰だ

2011年12月3日21時52分発行